

国際シンポジウム “Indigenous Communities: Voices towards Sustainability”報告書

加藤優子（ASAFAS 地域進化論）

2006年3月13日、マレーシア国民大学（Universiti Kebangsaan Malaysia: UKM）の環境・開発研究所（Institute for Environment and Development、以下LESTARI）において、LESTARIと京都大学21世紀COEプログラムの共催により、国際シンポジウム“Indigenous Communities: Voices towards Sustainability”を開催した。参加者は約100人で、盛況のうちに幕を閉じた。

シンポジウムの目的は、1) 国家の周縁地域に位置するコミュニティを対象とした持続可能な開発のあり方について議論すること、2) 国家主導の開発過程で生じた先住民族コミュニティの変容を多面的に考察すること、3) 国家が先住民族コミュニティの開発への参加を促進することの是非を再検討することであった。

シンポジウムは4つのセッションで構成され、マレーシアの先住民族と開発、貧困、アイデンティティ、イスラーム、伝統的知識、家族などをテーマにした発表が行われた。

第1セッションでは、マレーシアの先住民（オラン・アスリ）研究の第一人者であるニューヨーク大学のRobert Dentan博士による特別講演が行われた。

第2セッションでは、マレーシア半島部のトレンガヌ州とパハン州のオラン・アスリに関する発表が行われた。トレンガヌ州のオラン・アスリが、政府主導のゴム・油ヤシのプランテーション開発の成功により経済状態が良好になっているとの報告がなされた一方で、パハン州のオラン・アスリについては観光開発の失敗等により、依然として貧困に苦しんでいることが指摘された。またオラン・アスリについては、貧困をめぐる問題の他にも、イスラームへの改宗をめぐる、国家とオラン・アスリのあいだで相互不信が生じていること、またオラン・アスリのなかの改宗者と非改宗者のあいだで社会的断裂がみられることも明らかにされた。

第3セッションでは、サバ州、サラワク州それぞれの先住民と開発とのかかわりをテーマとする研究成果が報告された。まず京都大学東南アジア研究所の長津一史が、マレーシア・フィリピンの境域に生きる海サマのイスラーム化とサバ州における宗教政策との関係について報告し、ついで北海道大学文学研究科の祖田亮次は、サラワク州のイバンの都市移住に伴う家族関係の変化について報告した。

第4セッションでは、5人のパネリストによるテーブル・ディスカッションがおこなわれた。テーマは「持続可能な開発と先住民族の将来」であった。このセッションでは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程の内藤大輔が、パネリストとしてマレーシア半島部ヌグリ・スンビラン州の先住民族トゥムアン・コミュニティにおける開発過程と生業の変容について発表した。

参加者は多彩なバックグラウンドで構成され、マレーシアやアメリカ、日本、その他様々な国の研究者のほか、UNDP、EU、マレーシア農村・地域開発省（Ministry of Rural and Regional Development Malaysia）の代表者、オラン・アス

りに関わる NGO グループやオラン・アスリ自身も参加した。また、このシンポジウムには、学術的報告のほか、オラン・アスリによる詩の朗読や、オラン・アスリによる「開発」についての提言（他者による開発についての語りに対する苛立ちを——間接的にではあったが示していた）もなされた。調査する側の議論にとどまらず、調査される側のオラン・アスリの見解・批判も取りあげられたことは、このシンポジウムの成果の一つであったといえる。ただし、語りのコンテキストはあくまで「調査する側」によってつくられており、それゆえかれらの声の自発性が大きく制約されていたことは、当然看過してはならない。

シンポジウムの後、LESTARI 副所長でありかつ高名なオラン・アスリ研究でもある Hood Salleh 教授が、オラン・アスリの参加者（Hood 教授とは 30 年来の友人関係にある）と京都大学のスタッフを招いてささやかな懇親会を設けてくださった。この場でのオラン・アスリの人びとの遠慮のない語りこそ、シンポジウムで披露されるにふさわしかった。そうした語りの紡がれる場を、かれら（に限らず調査される側）とともにつくることを次の課題にしたい。